

さけぶ・わめく

秋 山 俊 広

1. はじめに

(1) 犯人は刑事にむかって 「近よるな！」と さげんだ。

(2) 犯人は刑事にむかって 「近よるな！」と わめいた。

上の(1)、(2)はいずれも自然な文であり、この場合「さけぶ」「わめく」は「大きな声を出す」という共通した意味をもっている。しかし、次のような用法の違いもみられる。

(3) あの事故のとき、よくぞ「危ない！」と さげんしてくれた。

(4)[×] あの事故のとき、よくぞ「危ない！」と わめいてくれた。

(5)[×] 彼は 「冗談じゃない！」と さげびちらした。

(6) 彼は 「冗談じゃない！」と わめきちらした。

また、「さけぶ」には「世界平和がさげばれている」のように、具体的な発声を伴うとは限らない場合を表す用法もあるが、本稿ではそうした用法は除外して、発声としての「さけぶ」「わめく」について、その意味用法の差を記述していく。

2. 分 析

2.1. 主 体

「さけぶ」「わめく」ともに、主体は人間である。

(7) サルは さげんで 仲間に危険を知らせる。

(8) ボスに威圧されて 若いおすザルが わめきだした。

(7)、(8)のように、サルなども主体となりうるが、原則として主体は人間である。

2.2. 声の大小・いきおい

「さけぶ」には「小声で」などの表現と共起しうる用法がある。

(9) 彼は私にむかって 「早くしろ！」と さげんだ。

(10) 彼は私にむかって 「早くしろ！」と わめいた。

(11) 彼は私にむかって 「早くしろ！」と 小声で さげんだ。

(12)[×] 彼は私にむかって 「早くしろ！」と 小声で わめいた。

この点に関して、国立国語研究所1972にいくつかの実例を挙げて記述している部分

がある。

この動詞（注：「さけぶ」）は、一般には、大声をあげることをあらわすといって、まちがいはないのだが、まれに、小さな声でいうばあいにもつかわれる。

(13) 「又、そんなことを！」

私はいかにも焦れつたいやうに小さく叫んだ。（風立ちぬ）

(14) そのとき病人が不意に

「あら、お父様」とかすかに叫んだ。（風立ちぬ）

(15) 「おゝ。アントニオ・ルビノノルビノノ」と低くふるへるやうに叫んだ。（青銅の基督）

(16) 低い声で一人が叫ぶと、それまで、ちつと動かずに何かを見詰めてゐた人々が、急に身動きし、いそがしく手を出したり引込めたりして紙幣をやり取りした。（帰郷）

（略）このように「小さくさけぶ」という例もあることは、単に量の大小だけではこの動詞を規定することができないことを示している。（略）「さけぶ」のばあいには、そのほかに、声の出し方、すなわち感情をこめて一定のイントネーションで発音するというような条件も加わってくるのである。

（注：233ページ～234ページ。例文番号は本稿での通し番号として筆者がつけた）
ところが、これらの「さけぶ」も「弱く」とは共起しない。

(17)[×] 彼は私にむかって 「早くしろ！」と 弱く さげんだ。

(18)[×] 「又、そんなことを！」

私はいかにも焦れつたいやうに 弱く さげんだ。

(19)[×] そのとき病人が不意に、

「あら、お父様」と 弱く さげんだ。

(20)[×] 「おお、アントニオ・ルビノノルビノノ」と 弱く ふるえるやうに さげんだ。

(21)[×] 弱い声で 一人が さけぶと、それまで、じつと動かずに何かを見詰めていた人々が、急に身動きし、いそがしく手を出したり引込めたりして紙幣をやり取りした。

したがって本稿では、「さけぶ」に強いいきおいによる発声、という意味特徴を認める。

「さけぶ」には「小声で」と共起しない用法もある。

(22) 彼はびっくりして思わず 「わあっ！」と さげんだ。

(23)[×] 彼はびっくりして思わず 「わあっ！」と 小声で さげんだ。

(24) 彼は足を踏まれた瞬間 「あいたっ！」と さげんだ。

(25) *彼は足を踏まれた瞬間 「あいたっ！」と 小聲で さげんだ。

これらの「さげぶ」は大きい声を出すことを表しているが、大きい声は必然的に強いいきおいを伴う。したがって「さげぶ」の意味特徴は、強いいきおいで発声する、ということになる。

一方、「わめく」は(12)のように、「小聲で」とは共起しない。「わめく」は大きい声を出す、という意味特徴を持つ。

2.3. 動作に対する評価

2.3.1. ニュアンスの違い

(26) 彼女は男に危険が迫っていることを懸命に伝えたが男は 「何を さげんでいるのだろう」と 思っていた。

(27) 彼女は男に危険が迫っていることを懸命に伝えたが男は 「何を わめいているのだろう」と 思っていた。

上の(26)、(27)はいずれも自然な文であるが、意味内容において、全く等質というわけではない。(26)での「何をさげんでいるのだろう」という疑問は、「どういうことを言っているのだろう」とも言い換えられ、発声内容を問うものであり、(27)での「何をわめいているのだろう」という疑問は、「なぜあんなに大きい声を出すのだろう」とも言い換えられ、「彼女」の行為全体に対する問いである、と捉えるのが、何か特別な文脈が存在するのではないかぎり、一般的であると考えられる。

この違いは、「さげぶ」「わめく」両動詞のニュアンスの違い、つまり、どんな事柄に注目して描いているかという違いによるものと考えられる。すなわち、「さげぶ」は発声そのものに注目する語であるのに対し、「わめく」の場合はその発声という行為と状況等との関わりに注目し「事態」として捉えて評価を与える語である（評価については次項参照）、という違いである。このような違いは、次のような例文からも明らかである。

(28)[?] その婦人は 自分の服が濡れたのは私の傘の持ち方が悪いからだという意味のことを 長々と さげんだ。

(29) その婦人は 自分の服が濡れたのは私の傘の持ち方が悪いからだという意味のことを 長々と わめいた。

(28)が適格な文となるのは、一音一音を「長々と」伸ばして発声したことを表す場合においてであり、それに対して(29)は、長時間にわたっていろいろなことを言ったとい

うことを表す。つまり、「さけぶ」「わめく」両動詞のニュアンスの違いにより、「長々と」という副詞句が、(28)では発声そのものの様態を表すのに対し、(29)では「事態」の様態を表す、という違いを生じるのである。

2.3.2. 「わめく」における「事態」としての動作に対する評価

「わめく」は、発声という動作を状況等との関わりにおいて「事態」として捉える、ということは前項で述べたとおりであるが、「わめく」の意味特徴として、「事態」に対して否定的な評価が与えられている、ということが挙げられる。

(30) あの事故のとき よくぞ「危ない！」と さげんで くれた。〔=(3)〕

(31)[×] あの事故のとき よくぞ「危ない！」と わめいて くれた。〔=(4)〕

(31)が非文となるのは、「わめく」の否定的評価が与えられているという意味特徴と、「よくぞ〜くれた」という表現の肯定的な意味とが矛盾するためである。

評価をするのは描き手であり、その基準は、他者（いかなる他者も想定できない場合主体）に何らかの利益となるかどうかである。

(32) 私は「危ないぞ！」と必死に さげんだのだが 彼は「ゴチャゴチャ わめくぞ！」と言って耳を貸さなかった。

(32)において、「危ないぞ！」という一つの発声に対して、「私」と「彼」という描き手の違いによって評価が異なっている。すなわち、「危ないぞ！」という発声が分かりきったことである、集中力を欠くこととなる、またはそもそも「私」が嫌いである等の理由によって、「私」の発声は、「彼」にとっては、他者（この場合「彼」）に何の利益にもならない「事態」として、否定的に評価されるのである。

(33)[×] 彼は「冗談じゃない！」と さげびちらした。〔=(5)〕

(34) 彼は「冗談じゃない！」と わめきちらした。〔=(6)〕

「〜ちらす」との複合語は、(33)が非文であるように、「わめきちらす」だけが自然である。「〜ちらす」について『新明解国語辞典第三版』では、「〔接尾語的に〕無秩序にその動作を重ねることを表す」と記述している。ところが、「無秩序」であるかどうかの判断は、おそらく描き手がおこなっているものと考えられる。この描き手による判断（しかも否定的なもの）が行われている、という点で「〜ちらす」と「わめく」との意味特徴が一致するため、「わめきちらす」は複合語として熟したと考えられる。これに対して、「さけぶ」にはそうした意味がないため、「さげびちらす」は熟さなかったものと考えられる。

2.4. 自発的・反射的

「さけぶ」「わめく」とともに自発的発声を表す。

(35) 彼は優勝して 「やったあ！」と さけんだ。

(36) 彼は怒って 「バカヤロー！」と わめいた。

(37) 犯人は刑事にむかって 「近よるな！」と さけんだ。〔=(1)〕

(38) 犯人は刑事にむかって 「近よるな！」と わめいた。〔=(2)〕

(39) 男が何やら さけんでいる。

(40) 男が何やら わめいている。

自発的発声とは、次の「外的刺激に対する反射的発声」以外の発声である。(35)、(36)のようないわゆる喜怒哀楽、(37)、(38)のような他者へのはたらきかけなど、広い意味での感情の表出である場合が多いが、(39)、(40)のように必ずしも何らかの感情の表出であるといえない場合にも自然である。

ところが「さけぶ」には、前述の外的刺激に対する反射的発声を表す用法もある。

(41) 彼はびっくりして思わず 「わあっ！」と さけんだ。〔=(22)〕

(42)[×] 彼はびっくりして思わず 「わあっ！」と わめいた。

(43) 彼は足を踏まれた瞬間 「あいたっ！」と さけんだ。〔=(24)〕

(44)[×] 彼は足を踏まれた瞬間 「あいたっ！」と わめいた。

「さけぶ」が、自発的発声のほかに、外的刺激に対する反射的発声を表しうるのに対して、「わめく」は、(42)、(44)が非文であるように、反射的発声を表さない。

(45) 彼は足を踏まれて 「ああ痛い！おお痛い！」と わめいた。

(45)は、外的刺激に対する動作であるという点では(42)、(44)と同様であるが、反射的発声というよりは、足を踏んだ人に対する抗議のあらわれ、すなわち感情の表出と考えられ、その限りにおいて自然な文である。したがってここでは、「さけぶ」は自発的発声および反射的発声を表し、「わめく」は自発的発声のみを表すとする。

3. まとめ

以上で行ってきた分析により、「さけぶ」「わめく」の意味をそれぞれ次のようにまとめる。

「さけぶ」 人が、自発的に、または、外的刺激に対して反射的に、強いいきおいで、発声すること。

「わめく」 人が、自発的に、大きい声を出すこと。(描き手は、誰の利益にもならない行為として、否定的に評価している)

／参考文献／

- 山田忠雄他編1981 『新明解国語辞典第三版』 三省堂
国立国語研究所1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版

言語経歴 1967年10月 宮城県生まれ
0歳～4歳 仙台市
4歳～5歳 宮城県岩沼市
5歳 栃木県宇都宮市
5歳～7歳 神奈川県横浜市
7歳～9歳 千葉県木更津市
9歳～10歳 東京都練馬区
10歳～12歳 群馬県多野郡新町
12歳～13歳 茨城県猿島郡総和町
13歳～16歳 東京都練馬区
16歳～ 神奈川県横浜市
(あきやま としひろ・東京都立大学学生)